

『だまされAV撮影～イケメン男優に翻弄されて初体験～』

著：月乃かりん

ill：八千代ハル

緊張してギクシャクと動くおれを、仁がエスコートする。スタジオに入る直前に、耳元で囁かれた。

「何も恥ずかしがることはないよ。おれも、健蔵も、スタッフも、ここにいるのはみんなゲイだ。君を見下したり、軽蔑したり、気持ち悪がったりはしない。おれたちは仲間だ。素のままの君でいいんだ」

「素のままの……」

「そう。だから、我慢してきたものを解放してごらん。おれが手伝うから。さあ行こう」

仁の囁く言葉が、耳から心の中に流れ込む。

おれは大きく深呼吸して、足を踏み出した。

スタジオに入ると、気のよさそうな数人のスタッフが「よろしくお願いまーす」と声をかけてくる。

カメラを持つのは、宮近と同じくらいたくましい体をしている男だった。レフ板を持つ人と、照明ライト用のコードを持つ二人は、おれと同じ年くらいだ。

宮近を入れて四人。彼らに見られながら、この綺麗な男にあれこれされるのだと思うと、やはり恥ずかしくて落ち着かない。

宮近が、また仁にウィンクをして「さすがね」と親指を立てる。おれは宮近と仁の罠にはまったんだろうか。そんな不安がよぎったが、今更逃げ出すわけにもいかない。

むしろどこかで、騙されたことを言い訳に、仁の言う『解放』に気持ちが傾いている。

ここには、おれがゲイでも非難する人たちはいない。

誰にも打ち明けられない苦しみが、ほんの少し、軽くなった気がした。

「じゃあ仁、いつものように自由に動いてちょうだい。あんたは隣に住むお兄さん。天志君はお兄さんに憧れている高校生。名前はアヤト。夜這いに来たお兄さんに、好きなようにされて感じまくってくればそれでおしまい」

そんな簡単すぎる説明が終わると、おれはベッドで寝たふりをするように指示された。

三方を壁で囲まれたセットは、高校生アヤトの部屋のような。ベッドがあり、机があり、本棚とパソコンと、ゲームのコントローラーが転がっている。

言われたようにベッドへ入って目を閉じる。

「準備はいいわね。いくわよ。テイクワン。5、4、3……」

健蔵がカウントを出す。いよいよ始まるのだ。

カメラがすぐ近くで、おれの寝顔を撮っている気配がする。心臓が口から飛び出しそうなくらい緊張しながら、息を殺してじっとしていた。

かすかな足音が近づいてくる。おれはギュッと目を瞑った。すると、いきなり掛け布団をはぎとられ、驚いて目を開けた。

そこには、夜に紛れ込むような黒いシャツを着た仁が、仁王立ちしていた。

ベッドから、呆然とその姿を見上げると、仁は目を細め、わずかに首を傾げる。その仕草は子供のようにも、悪魔のようにも見えた。

「いつもおれを目で追っていたらろう」

意地悪そうな言葉に反応できず、おれは仁を見つめたまま動けない。

「もの欲しそうな顔しやがって、そのベッドで、おれに襲われる夢でも見てたのか」

耳元でおれを励ましてくれた仁とは違う物言いに、ようやくこれは演技なのだと気が付いた。宮近がスタッフに何かを小声で指示し、カメラが動く。

「襲ってやるよ。望み通りにな」

仁が膝でベッドに乗り上がると、ギシリと音をたててスプリングが軋む。思わず身がすくんだ。

『任せて』と言われて頷いたものの、何をどこまで任せればいいのかは聞いていない。素人相手にまさかさっきのビデオのようなことまではしないだろう。

先ほどの、話をしていた時の仁は優しく紳士的だった。

だが、今、こちらを見下ろして、目を細めている仁は別人のように見える。

まるで飢えたオオカミが獲物を前に、舌なめずりしているようだ。

「あの、ちょっと……」

どこまでやる気ですか？ と聞ける雰囲気でもなく。目の前に迫った仁が、片手で自分のシャツのボタンを外し始めた。

くっきりとした鎖骨から、なだらかな筋肉のある胸があらわになる。引き締まった腹部がチラッと覗いた。彼の醸し出す色気から目が離せない。

ジーンズからシャツをたくし上げたその手が、今度はこちらへ向かってくる。

「え……。やだちょ……」

脱がされると思ったおれの体は、条件反射のようにその手を拒絶する。しかしお構いなしに、仁の手がパジャマの上着を掴んだ。

抵抗は想定内だとでも言うように、いや、むしろそれが楽しいのか口元は笑っている。

「脱がなきゃ話にならないだろう」

とは、演技のセリフなのか、今更抵抗するなと諭しているのか。仁のなめらかな手は思いのほか力強い。

そのまま両手で、おれのパジャマの胸元を掴み、仁は意地悪くほくそ笑む。

「暴れるなよ。逆らったら、……どうなるかわかってるだろうな」

演出上のセリフに、いちいち意味はないのだとわかっているけど、『どうなるか』が怖い。

仁は何を考えた、何をしようとしているのか。本意を探ろうとしても、熱に浮かされたような仁の目に、数分前の優しさは見えなかった。

このまま犯されるのかもしれない。

ビデオを思い出すだけで羞恥と恐怖が込み上げてくる。

「おれ、あの……、初めてだから」

言い訳のように懇願した。

だから手加減してくれと言うつもりはなかったものの、掴まれたパジャマの前を力いっぱい左右に開かれ、弾け飛ぶボタンを目で追いながら、おれはもう、覚悟をするしかないのだと悟った。

仁は本気でおれを抱く気なのだ。

「教えてやるよ。お前がおれを見ながら想像していたものがどういうものなのか。このベッドで悶々と妄想していたものを、その体に刻んでやる。嬉しいだろう？ 夢が現実になって」

はだけたおれの胸に手が滑りこみ、いきなり乳首に爪を立てる。

「——ッ……！」

あまりの痛みに声も出せない。

「ずいぶん小さい乳首だな。感じるようにたっぷりかわいがって大きくしてやるよ」

言いながらキュッとつまむと、ぐりぐりと捻られた。

「あぁっ！ あっ！ やめて！」

「ほら、良い色になった」

嬉しそうに言う仁は、憎らしいほど笑顔が爽やかだ。

胸に目をやると、つねられた乳首は赤くなっていた。ヒリヒリとした痛みの後からジンジンとした痺れに似た疼きを感じ、呼吸が荒くなる。

「な、なにをするんですかっ、いきなり」

仁は、おれの抗議を笑顔でかわす。見る間にぷっくりと腫れてきた乳首を、今度は指で潰し、捏ねながら回されると、疼きが快感の波紋になって全身に広がっていく。

「なっ……ん……」と言ったきり、言葉が続かないおれを、見越したように仁が鼻で笑う。

「素直だな。思った通りの体だ」

仁の指が動くたび、得体の知れない感覚が湧きあがる。くすぐったいのか、じれったいのか、よくわからない。痛みとも違う。もっとじんわりとした熱のようなものだ。

戸惑う感覚に、仁が答えを言った。

「感じるんだろう？」

感じる？ これが？

これまで乳首なんか意識したこともない。皮膚の色が違うだけのただの飾りだと思っていた。まさか性感帯があるなんて知らなかった。

なのに、見下ろしたそこには、真っ赤になった突起が艶を放ち、何かを主張するようにピンと尖っている。

「ほら、つまみやすくなった」

「ふぁ……っ」

キュッとつままれると、力の抜けた声が漏れた。

無意識だった。自分の声じゃないみたいだ。

「美味そうな色」

舌なめずりをする唇が、胸に近づいたと思ったら、赤い舌先で突起をつく。

仁の生々しい体温に驚いて、体がビクッと震えた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>